

2010年度採択 研究の国際化推進プログラム「研究成果の国際的発信強化」研究成果報告書

研究代表者	所属機関・職名：情報理工学部・教授 氏名：大久保 英嗣
研究課題	情報理工学部の国際研究連携高度化のための大連理工大学との研究連携プロジェクト

・「成果発信」の目的・意義の概要

今次の国際的研究成果発信の目的・意義について、概要を記入してください。

2007年11月に大連理工大学の代表団が本学BKCに来訪したことから始まった両校情報系学部の関係は、何度かの相互訪問やメールによるやりとりを経て2008年に大連理工大学電子情報学院で開催されたAsian Joint Workshop on Information Technologyに結実した。本学から教員8名、大学院生を中心とする学生17名、職員4名が参加し、大連理工大学からも同規模の参加を得て、教員が互いの最新の研究成果の報告を行うとともに、学生によるポスターセッションを開催した。その結果、教員間、学生間、職員間で親密な交流が行われた。この成功を受け、2009年9月に、BKC情報理工学部において第2回のワークショップを開催した。第2回は、本学から教員6名、学生・院生16名の計22名、大連側は教員7名、学生・院生9名の計16名が参加・発表した。研究紹介、ポスターセッションには情報理工学部執行部、学科長、発表学生の指導教員、興味を持った教員や学生など、本学より多数の参加があった。あまりの熱心な意見交換のために、ポスターセッションをなかなか終えられない状況であった。懇親会での学生間の交流は通常の国際会議では見られない程の親密なものであった。また両校で共同研究を新たに始めることとなったが、これは大きな収穫であった。この成功を受けて大連側より、2010年度に大連理工大学にて第3回を開催したい由の提案があり、全員の賛同を得た。第3回のワークショップは、情報理工学部のG30における大連理工大学との連携強化の一環と位置づけており、本ワークショップを成功に導くためには、これまで以上の規模の参加者を確保する必要があり、特に学生の参加を促すことが重要である。学生への補助を中心に、ワークショップの準備のための補助を申請した次第である。ちなみに、2009年度にも申請し、助成を受けている。

・「成果発信」の成果と今後の展開計画の概要

今次の国際的研究成果発信で得られた成果と今後の展開計画について、概要を記入してください。

ワークショップは9月16日、17日に大連理工大学本部キャンパスにて開催された。参加者は、本学情報理工学部より教員9名、職員2名、学生38名(D3名、M31名、B4名)が訪問し、教員から6件の研究紹介と、全学生が2時間のポスター発表を行った。大連理工大学からは、ソフトウェア学院と電子情報学院より参加があり、教員から8件の研究紹介と、学生35名が2時間のポスター発表を行った。使用言語は英語であった。教員の研究紹介からは、すでに昨年度より機械翻訳に関する共同研究が始まっており、両大学間での研究内容の相互理解はかなり深まってきたことが確認できた。学生の発表については、本学と大連理工大学とでセッションを分けて実施したが、本学学生の発表に対して大連側学生、大連学生の発表に対して本学学生が、それぞれに慣れない英語を用いて熱心な議論を行った。単に相互理解を深めただけでなく、テーマ設定についての双方の特徴を認識し、アプローチの違いなども意識しながら、掘り下げた意見交換を活発に行っていた。双方の研究の特徴をあえて単純化すれば、理論の精緻化を中心とするオーソドックスな研究スタイルをとる大連に対し、本学は、理論を基礎に置きつつ、幅広い分野に理論を実践展開する研究が目立った。本学学生へのアンケートでは、中国人学生と英語でコミュニケーションを行うことで英語の重要性を再認識できた点、自らの研究テーマの今後の方向にとって有益な意見を得られた点、大連学生のハングリー精神や積極性に刺激を受けた点などが指摘され、学生にとって意義深い経験であったことがわかる。

2011年度は本学でワークショップを開催する方向で合意した。これまでの3回のワークショップの成果を受けて、学生主体で企画・運営をしてはどうかという大連側の提案があり、合意した。